

説教 『背く者のための十字架』 山本 護牧師
聖書 イザヤ書 53：11～12／マタイ福音書 27：45～53

十字架は、ローマ帝国の、民衆に影響を及ぼす政治犯や思想犯を見せしめに処刑する道具。だから既存の体制に抗う者たちは、十字架で公開処刑された。それでは、イエスの十字架と、おびただしい政治犯の十字架とでは、何が違うのであろうか。ローマの権力者やユダヤの権威者にとっては同じだ。イエスはうまく治まっている社会秩序を脅かす、危険分子の一人に過ぎない。だが聖書の視点、すなわち私たちの見方は違う。十字架は、神の子である「愛の証人」が父なる神になぜ見捨てられるのか、という厳しい問いである。これにどう答えるか、キリスト者一人ひとりにその問いが迫ってくる。

世の暗闇の中で(マタイ 27:45)、「イエスは大声で叫ばれた。[エリ、エリ、レマ、サバクタニ] これは[わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか] という意味である(27:46)」。十字架につけられたイエスは、かすれた声を絞り出して問う。十字架に近づく私たちも不安になって問う。「御子イエスを神はなぜ見捨てるのか」と。私たちは何を不安に感じているのか。イエスを見捨てるような神をどう信じればいいのか、「いや逆転劇があるはずだ」という期待が裏切られる不安なのか。

イエスは叫び(27:46)、周囲の者は言葉尻を捉え(エリ=エリヤ)、皮肉を込めて嘲笑する(27:47~49)。「しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた(27:50)」。逆転劇はなく、ぶざまに死んでいった。そして死に伴う幾つかの出来事が静かに報告される。神殿の垂れ幕が裂け、地震が起こり、墓が開いて死者が甦った(27:51~52)。これは何を意味しているのか。裂けた垂れ幕は既存の信仰の終わりを、地震は世の変革を、甦りは死をも凌駕する力を告げているのかもしれない。出来事は、静かに、淡々と告げられている。このさりげなさは、後に起こる途方もない復活を暗示しているかのようだ。

「わたしの僕は、多くの人々が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った(イザヤ 53:11)」。ああ、やはり、そうだったのか。イエスは私たちの罪を負って、父なる神に見捨てられた。神は、イエスにおいて人間の最底辺にまで踏み込まれ、私たちの罪を、争いを、悲惨を、憎悪を一身に負い、私たちを「正しい者」へ導こうとされた。そのために神はイエスを見捨て、御自らをも見捨てたのだ。

「多くの人々の過ちを担い、背いた者のために執り成したのは、この人であった(53:12)」。人間の過ちを放っておけずに担ってしまう方。背く人間のために、十字架で殺されても執り成してください方。神は、私たちの罪と暗闇を放置したままではおられない。御子イエスが「わが神、なぜわたしを見捨てるのか(マタイ 27:46)」と叫んでも、神は「私」の方を優先し、御自ら十字架を負われる。これが私たちの信ずる神、私たちの主、私たちの希望、私たちと共に死んで生きるキリストなのだ(ロマ 6:8)。

十字架上につけられた神の子を前に、私は自らに痛みを覚え、痛みの「質」を想像する。「死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか(1コリント 15:55)」。鋭く太い「棘」で、傷口は深くじんじん痛む。しかし棘は抜いてもらったので「どことなく爽やかで明るい」。ただ死の棘、罪の棘の傷跡は残る。私の身代わりとなり、棘に刺し貫かれているキリストの面影は永遠に続く。



《おまけのひとこと》

傷が大きかろうとも それが苦痛なのではない 肌から刺さり 心に達した棘が私の全体を苛む
十字架は棘の肩代わり 傷は癒えても 十字架を思い起こす しくりとした痛みを忘れたくない